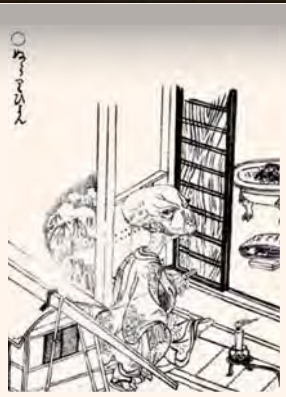
熊野の森から

怪しの熊野

其の三十「巨星逝く」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

平成27年11月30日、妖怪界の巨星、水木しげる先生がお亡くなりになった。妖怪に取り憑（つ）かれている筆者にとっては衝撃であり、水木作品を再び読み返してみた。その中で筆者の目を引いたのは、妖怪と人間の関係性についてであった。若い頃の作品では、妖怪は恐ろしいもので、出遭った人間は食い殺されるか破滅あるいは無間地獄へと追い込まれていた。子どもたちに人気のゲゲゲの鬼太郎も、原作では不気味な妖怪、墓場鬼太郎であったし、闇に巣くう妖怪と人間は相容れないものだとして描かれていた。この作風は、その後も継続されるが、徐々に水木作品中での妖怪と人間の関係性は変わっていく。一見では、不気味で恐ろしい妖怪でも、じっくりと話を聞いてみると、実は事情があって妖怪に身を落としているだとか、日常生活は穏やかで面白おかしく生きているだとか、改心して人間社会の中でひっそりと生きる道を選択する妖怪や、人間と仲良く暮らす妖怪までも登場するようになる。



水木しげる作品に度々登場する、妖怪の総大将、紀州の「ぬらりひょん」は他の多くの水木妖怪同様に、江戸時代の妖怪絵師、鳥山石燕（とりやま・せきえん）の絵が元になっている。（国会図書館近代デジタルライブラリーより転載）

明治時代の妖怪研究の第一人者、井上円了によると、妖怪は大枠では二つに分類されるとのことだ。簡単にいうと本物（実怪）と偽物（虚怪）である。虚怪は、多くは見間違いに起因するが、被差別民を意図的に妖怪と扱ったことも多々あったようだ。和歌山の巨星、南方熊楠が民俗学者の柳田圀男と仲違いした理由も、差別をめぐってのことであった。山中に暮らす人々を、特殊文化を持つ「山人」だと位置づけた柳田に対し、熊楠は柳田の無知、情報不足が故の職業差別、集落差別であると反発する。

夏は川に暮らし、冬には山に登る熊野の河童「がしゃんぼ」は、山を移動しながら暮らしを立てていた炭焼きさんへの差別が生み出した「虚怪」であった可能性がある。（イラストはBoBo）

水木作品中の妖怪が変化した理由は、熊楠同様に水木先生が差別を憎んだからではないか。被差別民との付き合いを通じ、差別は不当であるとの主張があったとすると、水木作品は妖怪話を題材に、社会の闇、差別や争いという人間の愚かさを指摘していたのかも知れない。鬼太郎のゲゲゲは、水木先生の幼少の頃のあだ名「ゲゲ（シゲからの変換）」から来ており、水木先生ご自身が争いごとの仲介人を担いつつ、平和や平穏は他者理解から生まれるものだと訴えていたのではなかったのか。これは重要な教えであり、日常に生かしたい話だ。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。